

地中海古代都市の研究 (129)

メッセネにおける劇場調査報告 2009 (2) スケーネ

正会員 ○セイン・ソクンティー*¹ 伊藤重剛*²吉武隆一*³ 岩田千穂*⁴ 安井伸顕*⁴9. 建築歴史・意匠-4. 西洋建築史 建築歴史・意匠
ギリシア メッセネ 劇場 スケーネ

1. はじめに

前稿に引き続き、劇場のスケーネについて調査に基づいた現状報告を行い、復元を念頭に考察する。

スケーネは古代劇場における舞台とその背後の建物、およびその後方にある役者のための控え室等を含めた建物である。ギリシア時代には簡易的で仮設の建物であったが、時代が下るにつれ壮麗な建物へ変化したと考えられている。ローマ時代のスケーネは、通常オルケストラに面して舞台があり、その背後に舞台の背景となるスカエナエ・フロンスがある。舞台の前面にはプロスケニオンの壁があり、両脇にパラスケニオンがある。大きなスケーネでは、建物の背後にポストスケニオンが付くこともある。通常二階あるいは三階建てで、座席の最高部と同じくらいの高さがあった。また、建物の舞台側の面は一般にスカエナエ・フロンスと呼ばれ、華やかな装飾がほどこされた。

われわれは2008年度調査でスケーネ遺構の平面図、断面図を縮尺1/50で作成し、2009年度の調査で立面図を縮尺1/50で作成した。また、スカエナエ・フロンスのニッチは、縮尺1/20で詳細図を作成した。実測にあたっては、光波測距儀、レベル、曲尺、コンバックスなどを用い、最終的に手描きの実測図を作成した。

2. スケーネ遺構 (図1~3)

発掘者のP. テメリス氏によると、メッセネの劇場は最初ギリシア式劇場が建設され、のちに2度改築されたとされている。当該劇場の遺構で現存するスケーネ遺構は、主にローマ時代に建設されたものである。スケーネ遺構の平面はほぼ完全に左右対称である。正面の内法長さは29.47m、その後ろのポロスの躯体の壁厚が3.44m、全体の長さは後室南側の連続した壁の長さから46.60mである。両舞台袖の長さは、スケーネ正面から全面隅部分まで6.10mである。

2-1. プロスケニオン

スケーネの正面壁から5.27m離れた舞台前面のオルケストラに接する部分に、プロスケニオンの壁が残っ

ている。残存高さは約1mで、下部が乱石積み (opus incertum)、上部が網目積み (opus reticulatum) として作られており、スカエナエ・フロンスの正面壁から5.27m離れた位置に作られている。プロスケニオンの壁全体の長さは、舞台両側にある階段の内側までの距離を含めて25.47m、正面中央部分のみで16.47m、壁体の厚さは1.50から1.55mである。正面中央部分には直径1.83mの半円形ニッチが2つ左右対称に配置され、ニッチ同士は4.86m離れている。西側のニッチから西へ1.20mの位置に長さ1.56m、奥行き0.26mの浅い矩形のニッチがつけられている。おそらく東側にもつけられていたと考えられるが、現在は残っていない。仕上げについては、躯体に厚さ約5cmの漆喰を塗り、その上に1.5~2cm厚さの大理石の化粧材を張った痕跡が観察される。

2-2. パラスケニオン

パラスケニオンは、オルケストラから舞台へ通じる階段通路で、プロスケニオンの左右に作られる。メッセネの劇場にも、東西にそれぞれパラスケニオンがある。東側では、3段の階段が残っていて、幅は約1.8mである。西側では、4段の階段が残っていて、幅は約2.0mである。

2-3. 舞台 (図4)

コの字形のスカエナエ・フロンスに挟まれた部分が舞台である。現在は基礎しか残っておらず、舞台は木造であったと考えられる。舞台の下は地面が露出しており、そこに舞台の床を支えた石材や円柱の列が並んでいる。またローマ時代のスケーネが建設されるよりも前に建てられた、ヘレニズム期のスケーネ跡と思われる遺構が残っていた。

ポロスの壁は、石材を縦使いで2列に並べたもので、長さ約26.5m幅約0.96mあり、壁の上面はニッチ床面から約1.15m低い。スカエナエ・フロンスから東端で0.85m、西端で0.65m離れた位置にあり、スケーネ遺構にはほぼ平行だが、わずかながら反時計回りに約20秒傾いている。西端部にはポロス壁に直角に接する短い壁

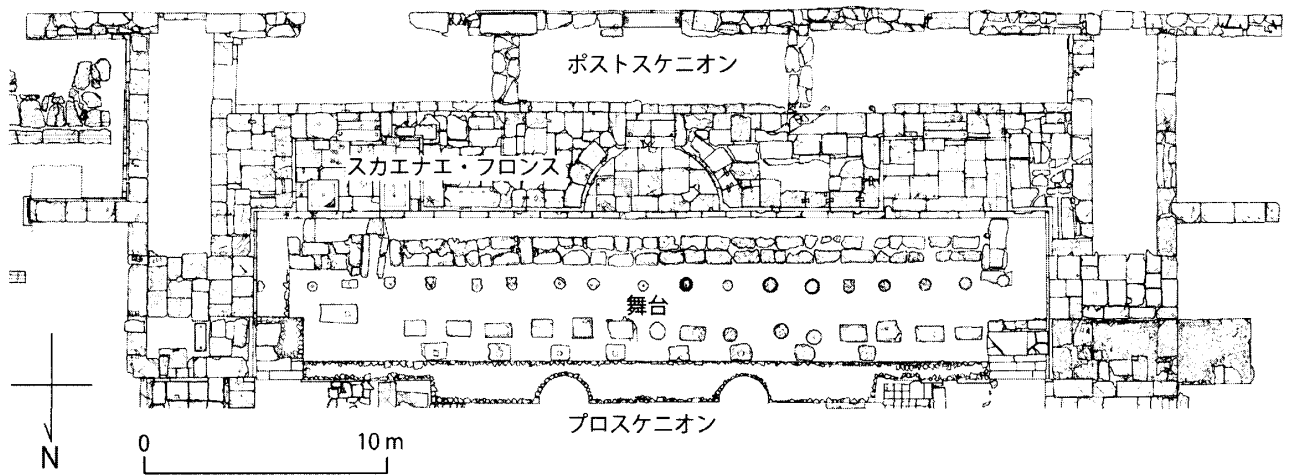


図1 スケーネ平面図 (熊本大学ギリシア古代建築調査団作成)

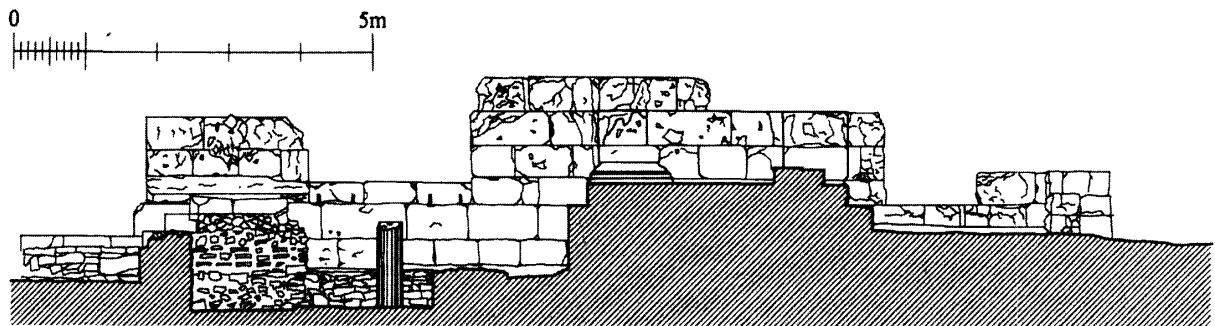


図2 スケーネ南北断面図、西から東を望む (熊本大学ギリシア古代建築調査団作成)



図3 オルケストラから見たスケーネの全景

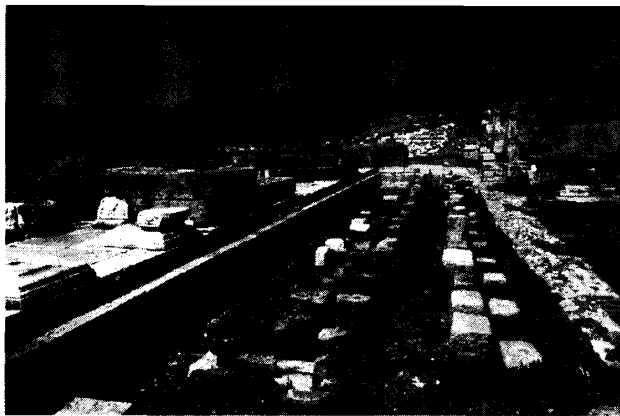


図4 オルケストラから見たスケーネの全景

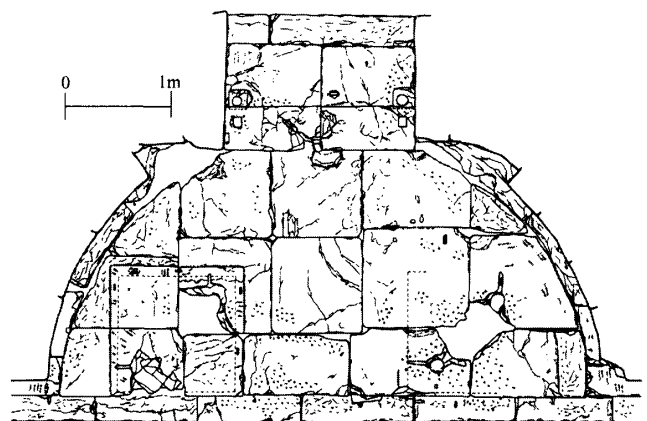


図5 中央ニッチ詳細平面図

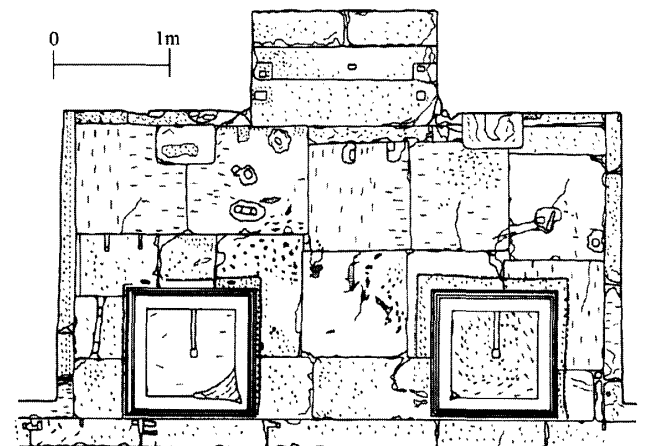


図6 東ニッチ詳細平面図

があり、T字型になっている。この壁は、明らかに大きな建物の基礎であり、石灰岩ではなくポロスでできていることから、ローマ時代のスケエネが建てられる前の、ヘレニズム期のスケエネ建物の前面の基礎であると考えられる。

また、ポロスの壁から内法で0.35 m～0.60 mの位置に円柱ドラムや半円柱ドラムなどが19本、列状にほぼ同じ高さに並んでいる。これらの柱の材料はすべてポロスである。円柱ドラムの列はスケエネ遺構と平行関係にあり、スケエネの西壁から約2.20 m、心々間距離で約2.50 m離れている。

円柱はフルートの形状からイオニア式もしくはコリント式である。礎盤を持つ円柱ドラムが4個、礎盤を持たないものが8個、角柱つきのものが6個、角柱1個からなり、柱頭直下にあたる円柱ドラムはない。円柱同士の心々間距離は1.25～1.85 mであり、一定でない。円柱の高さは1.25～1.3 mであり、円柱上面はニッチ床面より0.54～0.64 m低い位置になる。

角柱付きの半円形ドラムの側面には、0.12～0.16 mの溝が彫られていることから、この部分にパネルをはめ込んだと考えられる。これら半円形ドラムは、ヘレニズム期のスケエネのプロスケニオンを構成する部材であったと推察される。

ポロスの円柱や半円柱の列よりさらに北側に、矩形の石材11個と円柱ドラムを4個並べた石材の列がある。矩形の石材11個のうち9個はポロス製、2個は石灰岩製であり、幅はおよそ0.9～0.5 m、高さ0.4～0.5 mである。これらの部材は地面に直接置かれている。この列のほぼ中央にあたる所に石灰岩製のドリズ式四分の三ドラムがあり、これより西側には直径0.55 m、高さ0.4～0.5 mのフルートを持たない円柱ドラムが3本ある。これらの石材の列は、部材の種類が異なり高さも一定でないため、なんの目的で作られたのかは不明である。

矩形石材の列のさらに北側に、ローマ時代の乱石積み (opus incertum) のプロスケニオンの壁に接するように矩形の穴をもつ石灰岩製スラブが8個等間隔で並べられている。プロスケニオンの北側壁と接していることから、これとスラブ列とは同時期に造られた可能性がある。

矩形石材の列のさらに北側に、ローマ時代のプロスケニオンの壁に接するように矩形の穴をもつ石灰岩製スラブが8個等間隔で並べられている。プロスケニオンの北側壁と接していることから、これとスラブ列とは同時期に造られた可能性がある。

2-4. スカエナエ・フロンス

スカエナエ・フロンスはスケエネ建物のうちオルケストラや観客席に面するファサードを指す。通常二層ないし三層から成るオーダーで飾られ、その豪華な意匠は観客を引きつけ圧倒するものであつただろうと推察される。たとえば、赤と白の斑紋大理石や緑色大理石を用いた円柱身、豊かな装飾をあしらった軒部材などはスカエナエ・フロン스에配置されたと考えられる¹⁾。スケエネ遺構において、スカエナエ・フロン스의部材はほとんど残っていない。

スケエネの前面は、3つのニッチを備えている。中央のニッチが最も大きく半円形をなしており、左右のニッチは矩形である (図5、6)。各々のニッチには、一辺1.20 m角の正方形の台座が2つずつ設置された痕が見られる。東側の矩形ニッチには実際に台座の一部が残っているが、他のニッチの台座は失われており、床にその痕跡が残っている。

スカエナエ・フロン스의躯体はポロスで造られており、これに大理石で化粧材で仕上げられていた。現在、遺構には大理石の仕上げは残っておらず、その痕跡がみられるだけであるが、基礎のポロスが残存しており、当時のスケエネの平面形をうかがい知ることができる。スカエナエ・フロン스의基礎は高さ0.43～0.47 mのポロス石材を積み上げて造られており、現在はニッチの床面から2、3段積み上げられたものが残存している。

ニッチの寸法

	正面	奥行	後入口幅
東側ニッチ	4.59 m	2.58 m	1.63 m
中央ニッチ	5.02 m	2.35 m	1.82 m
西側ニッチ	4.58 m	2.61 m	1.63 m

スケエネ正面は現在、床から下の部分が石灰岩、敷居や開口部の一部などが石灰岩で作られており、壁体の内部はポロスであり、これに大理石などで仕上げがしてあつたものと思われる。ポロスの石は高さ0.43～0.47 mの大きめの石を使っており、特に出隅部分などには、蝶ネクタイ (dove-tail) 型のクランプを使って補強されている。このポロスの壁体の厚さは3.45 mのマッシブなもので、現在は床面から2～3段まで残っている。

この厚い壁体の背後には、各ニッチの後に東西に長いほぼ同じ大きさの後室が並んでいる。各部屋には南側の壁にもニッチの入口と対応する入口があるが、東側の部屋では破壊されており確認できない。部屋の大きさは以下のとおりである。

各後室内法寸法

	東西	南北	南入口幅
東後室	9.72 m	2.92 m	1.19 m
中央後室	10.02 m	2.95 m	2.12 m
西後室	9.75 m	2.85 m	1.68 m

後壁の壁厚は0.75m、各室の仕切壁は0.85mであり、これらの壁は石灰岩で出来ている。東側部屋の東端、西側部屋の西端には、それぞれ両側の通路に通じる開口部の痕が確認されるが、敷居や立枠などは見当たらない。

スケーネの両側には、側面から舞台袖へと続く通路がある。東側の通路は、幅2.41m、長さ11.88m、南側に幅1.78mの入口をもち、北側にはオルケストラへ降りる階段がある。この通路の北側付近には、舞台袖への入口、その反対側への入口へと2つの開口部も開いている。東側通路の壁の東側には、東側が吹き放たれた内法幅3.85m奥行き6.12mの部屋が1室付随している。

スケーネの西側の通路は、幅2.38m、長さは10.40mであり、南端に幅1.67mの入口がある。東側通路と同じく舞台袖への入口と、舞台の反対側への入口がある。幅はともに2.32mである。この通路北端部の入口部分は、東側通路と同じく石板上で舗装してある。通路の北端部には、東側通路と同じくオーケストラへ続く開口があるが、西側通路ではその部分が後の時代に網目積み (opus reticulatum) のレンガの壁でふさがれた。西側通路の壁の西側も、南側は西側に吹き放した奥行3.72m、幅6.10mの部屋がある。

2-5. ポストスケニオン

スケーネの後部にはポストスケニオンと呼ばれる通路がある。当該遺構のポストスケニオンは3部屋に分かれており、それぞれが3つのニッチに付けられた出入口を介して舞台と連絡している。また、ポストスケニオンの東西両脇にはそこから南北方向へ向かう通路が設けられている。この通路は、舞台の両袖出入口へつながっており、役者やスタッフはここからも舞台とポストスケニオンとを往来できるようになっていた。

3. まとめ

メッセネの劇場のスケーネについて、現地調査によって明らかになったことをまとめると以下ようになる。

メッセネのスケーネは、ヘレニズム期に最初に建設され、その後ローマ時代に改築された。ヘレニズム期の遺構は、現在ではポロスの基礎が舞台の床下に確認できる。

このポロスの石列は、オルケストラの縁を通る円が接する位置にあるので、ヘレニズム期のスケーネの前面にあたと推測される。スケーネの前面にはポロスの半円柱が並び、柱と柱の間には装飾パネルが差し込まれていたと思われる。

ローマ時代には、大規模に改築されて現在の主な遺構の状態になった。コの字型のスケーネは、オルケストラに面して高くそびえ、客席に座る観客に対し、ローマ建築らしい豪華で圧倒的な印象を与えたに違いない。オルケストラの前面にはニッチを伴ったプロスケニオンがあり、両脇のパラスケニオンから舞台へ抜けることができた。舞台の背後には赤と白の斑紋大理石や緑色大理石を用いた円柱身、豊かな装飾をあしらった軒部材などで構成されるオーダーが立ち上がり、スカエナエ・フロンスのファサードを構成していた。ニッチや柱の間には、ローマ皇帝や劇場建設の寄贈者らの彫刻が並んでいた。劇を演ずる役者らは、ニッチの背後や舞台袖から自由に出入りできるようになっていた。

現在のローマ時代のスケーネをよく観察すると、後に手を加えた形跡がある。ニッチには2本の柱が立っていたが、床面には大きさの異なる正方形のポデュウムの痕跡が残っている。したがって、スカエナエ・フロンスの床から上は、一度は建て直されたと考えられる。

以上のことから、メッセネ劇場のスケーネは、ヘレニズム期に最初に建設され、ローマ時代に建て直されたが、その後もう一度改築されたことが分かった。

謝辞

本研究は日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (S) 課題番号 20226012 による研究助成を受けた。記して謝意を表す。

注

1) スカエナエ・フロンスの部材については、次稿を参照。岩田千穂他、「地中海古代都市の研究 (130) メッセネにおける劇場調査報告 2009 (3) スケーネ部材」日本建築学会九州支部研究報告 2010年3月

* 1 熊本大学工学部 学部生
* 2 熊本大学工学部建築学科 教授 工博
* 3 熊本大学大学院先端機構 特任助教 博士 (工学)
* 4 熊本大学大学院 大学院生

Undergraduate Student, Kumamoto University
Prof., Dr.Eng., Kumamoto University
Assistant Prof., Dr. Eng., Kumamoto University
Postgraduate Student, Kumamoto University